

妹はここにいる



太平洋にそそぐ北上川の河口。ダンブカーが走り、道路工事の音が響く。その一角で、2階建ての校舎は壁が崩れ、コンクリートの柱が横たわったままだ。

宮城県石巻市の旧大川小学校。佐藤そのみさん(19)はかつての母校に、大学のある埼玉県から毎月のように足を運ぶ。「大川小学校が孤立しています」。あの日の激しい揺れ



佐藤みずほさん



も自然と足が向いた。一緒に通った校舎の赤い屋根、空の青色包み込む木々の緑色。そ

の後、ラジオが伝えていた。妹のみずほさん(当時12)は帰って来ない。母の車にパンや毛布を積んで学校に向かった。途中、知り合いから遺体が見つかったと告げられた。母と泣き崩れた。

遺体安置所から連れて帰り、ひつぎの隣でギターを弾いた。みずほさんが好きだったバンド「BUM P OF CHICKEN」の曲を口ずさんだ。

命の記憶 残したいけど

「私、震災がなかったら合格してない」
講義とアルバイトの毎日に、夢に近づくと手応えを感じられない。何をするために、ここにいるんだろう……。自分を見失った。

昨年末、同じように妹を亡くした後輩と一緒に、たまに砂をほうきで掃きながら校舎を歩いた。
中庭で練習した1輪車。色あせた本棚に並ぶ伝記や児童書。学年の終わりに窓の外に広がる景色を自由帳にスケッチした。そんな記憶がよみがえると、「もっとなんぼらない」という気持ちがいってくる。

6年生の教室前のコートをかけるフックには、「佐藤みずほ」と妹の名が書かれたシールがまた貼つてある。
その校舎を解体するかもしれないという話を高校2年生のときに耳にした。

74人の子どもが津波にのまれた現場。みずほさんの砂だらけの顔を、母は「ごめんね、ごめんね」と声をかけながらふいた。潮水たなごうから、右目から涙のようにスーッと流れた。校舎は多くの命が失われた重みを記憶する場でもある。

観光バスで来て校舎を記念撮影する人もいる。「見たらびつらい。壊してほしい」。遺族の不満を聞いたこともある。
でも、校舎がなくなると慰霊碑だけになってしまったら、何も伝えられなくなるのではないか。

2月、住民の意見を聴く集会で「校舎を残してほしい」と訴えた。市長は今月中にも結論を出す。
埼玉のアパートには、祖母に抱かれて笑顔になった妹の写真を飾っている。妹の記憶は年ごとに薄らぐゆく。これから震災にどう向きあえばいいのだろう。そう思うと、人前でもふっと涙がこぼれる。

空、田んぼ、桜並木……。撮りためた大川小1帯の色とりどりの写真を時々見かえます。まだ、ふるさとの映画のイメージは固まらない。時間をかけて、ひびくように思っ



大川小学校の旧校舎前で話す佐藤そのみさん＝宮城県石巻市、日吉隆吾撮影

被災地の人々は、大切な人を失った悲しみを胸に刻み、いのちと向きあい続けてきた。東日本大震災から5年。その歩みをたどった。

(宮崎佳助)